

彩の歳時記

平成三十一年 一月

正月立つ 春の初めに かくしつ
相し笑みてば 時じけめやも

正月立つ 春の初めに かくしつ
相し笑みてば 時じけめやも
大伴家持【717～785】 万葉集

「正月になって、春の初め、このようにして集まって共に笑い合えば、いつでも楽しいものです」

万葉集の時代から正月の様子が変わりないのは、歌を詠んだ人々の気持が今を生きる私達の心にも理解できるからです。正月はこのように互いに微笑み合っていたいもの。普段はあまり会話したことのない人とも「おめでどう」と言い合い、笑顔であいさつできるのは、正月ならではかもしれません。

一月の暦

一月の暦 睦月 正月に親しい者が集まり睦み合うという事から「睦び月」 祝月年初月
一日 元旦「旦」の字は地平線から昇る朝日を表す。

四方拝(しほうはい) 天皇が午前五時半(寅の刻)に東帯を着て神嘉殿の南座にて、皇大神宮 豊受大神宮・天神地祇・天地四方・山陵を拝し、豊作と無病息災を祈る。

二日 新年一般参賀 両陛下、成年の皇族方が宮殿で計七回、二重橋から皇居入場した国民から、参賀を受けられる。今上天皇の最後の登壇、退位されると平成天皇と称される。

二日・三日 第九十五回 東京箱根間往復大学駅伝競走 予選では「駒沢・順天堂・神奈川大学が上位三位」 正月の風物詩「箱根駅伝」として親しまれ、浴道に、多くマラソンファンが押し寄せる。

四日 官公庁御用始め 今年は今曜日のので、早い仕事始めに。
六日 小寒【二十四節気】寒の入り。この日から節分(立春の前日)までが寒中(寒の内とも)。

七日 七草【芹薺御形繁縷仏座松清白(せりなずなごぎょうはこべらほどけのぎすすなすすしろ)】
これぞ七草」という歌があり、日本古来の宮廷行事「若菜摘み」と一年の息災を願う粥を食す古代中国の習慣が結びつき「七草粥」に。江戸時代に一般に定着。

十一日 鏡開き 年神に供えた鏡餅を食べ、一家の円満を願う。鏡は円満を開くは末広がりの意。縁起を担ぎ、餅を「割る・切る」では無く、開くという。

十四日 成人の日 ハッピーマンデー制により、第二月曜日。平成十一年までは『一月十五日』。

十五日 小正月 元日の大正月に対して。本来の「松の内最後の日」。近年は七草までが「松の内」。

左義長(だんご焼)注連飾りや書初め等を燃やす火祭。地方により日時も呼び方も異なる。

十七日 阪神淡路大震災記念日 1995年(平成七年)M7.3の地震が発生。死者約6300人、家屋崩壊約30万戸、神戸市・他で今も式典が行われている。15年後にこれを凌ぐ巨大地震に見舞われ、「平成」という「年号」の由来「内外、天地とも平和が達成される」とは言い難かった「三十年」。

二十日 大寒【二十四節気】寒の真ん中で、一年で最も寒い時期である。

一月の歌 一月一日 明治二十八年 明治政府による元旦拜賀式の奉唱歌

現在でも正月番組などでよく聞く唱歌。作詞は第八十代出雲大社宮司の千家尊福(せんげたかとも)【1845～1918】、作曲は宮内省の雅楽長、上真行(うえさねみち)。当時、元旦には小中学生たちが登校して新年祝賀式典で歌われた。千家は神道大社教管長(初代)や元老院議員、貴族院議員、埼玉と静岡の県知事、東京府知事など歴任、出雲大社神楽殿に歌碑。

当初、二番冒頭は「初日の光 明(あきら)けく 治まる御代の今朝の空」。

「明(あきら)けく治まる」と「明治」を読み込んでいたが、大正2年に現在の歌詞に。「平成」が終わり、新しい年号に希望が見えますように。



年の始めの例(ためし)として 終りなき世のためたきを 松竹立てて 門ごとに 祝う今日こそ 楽しけれ 初日の光 さし出でて 四方(よも)に輝く今朝の空 君がみかげに比(たぐ)えつつ 仰ぎ見るこそ 尊とけれ



